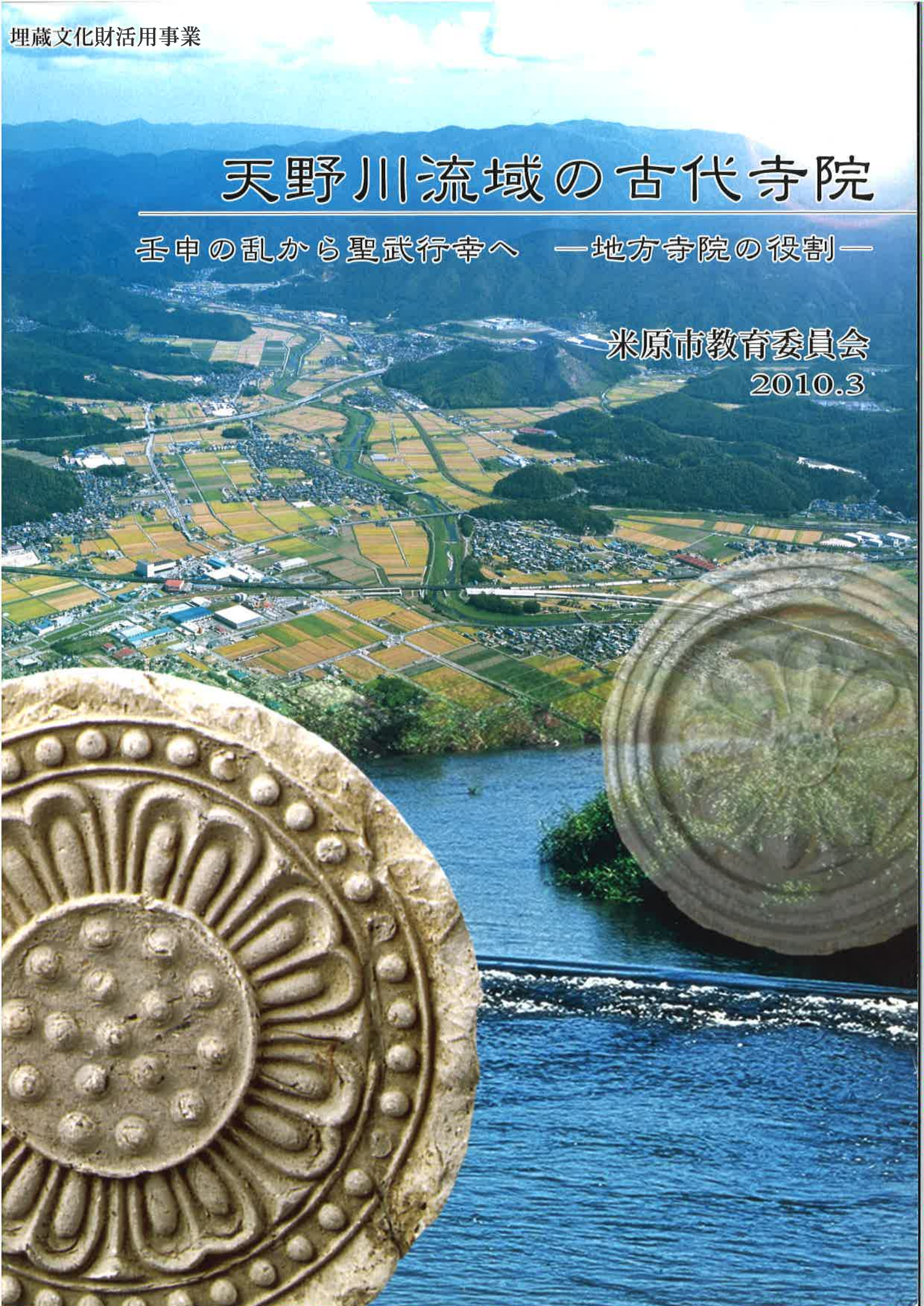


天野川流域の古代寺院

壬申の乱から聖武行幸へ — 地方寺院の役割 —

米原市教育委員会

2010.3



天野川流域の古代寺院

～地方寺院と交通～

—地方寺院の建立とその役割—

崇峻元年(588)、飛鳥寺の造営がはじまって以来、畿内を中心に伽藍をそなえた瓦葺きの寺院が次々に建立されていきます。538年に公伝したとされる仏教は、聖徳太子の登場で隆盛の緒につき、推古天皇32年(624)には46寺が(『日本書紀』)、持統天皇6年(692)には545寺があったといえます。律令体制が確立されていく天武天皇の頃には、国家統一のための思想的支柱として国家体制に組み込まれ、7世紀後半代の白鳳時代に、全国的な規模で、まさに爆発的に寺院が造営されました。近江ではおおよそ60カ所の白鳳期創建寺院遺跡が知られています。かつての権威の象徴であった前方後円墳の築造にかわる新たな事業が開始されるのです。

こうした地方寺院建立の背景には、大化元年(645)の「仏法興隆詔」などにみえる国家主導の仏教興隆策がありました。地方に突然あらわれた瓦葺きの壮大な寺院建物は、天皇を頂点とする律令国家形成と不可分な関係にあったようです。しかし、早くも霊亀2年(716)には寺院併合令が発令され、律令国家確立とともに、その歴史的役割を終えることとなります。

【関係年表】

西暦	年号	天皇	国内事項
538	舒明10	舒明	仏教公伝
607	推古15	推古	法隆寺創建
645	大化元	孝徳	大化の改新
663	天智2	天智	白村江の戦い
667	天智6	天智	大津京遷都
672	天武元	天武	壬申の乱 飛鳥京遷都
694	持統8	持統	藤原京遷都
701	大宝元	文武	大宝律令施行
710	和銅3	元明	平城京遷都
716	霊亀2	元正	寺院併合令
729	天平元	聖武	長屋王の変
740	天平12	聖武	藤原広嗣の乱 東国行幸 恭仁京遷都
742	天平14	聖武	紫香楽宮行幸

—米原市の古代寺院—

米原市の古代寺院は天野川流域に集中しています。そして、この川の流域には古代東山道が通過し、河口には朝妻湊が営まれました。さらに、この地は、「壬申の乱」や「聖武行幸」といった、歴史のうねりの舞台でもあります。

天野川流域の歴史を特色づける交通の要衝性と、そのなかで地方寺院が果たした歴史的役割について、出土した遺物や遺構を中心に紹介しましょう。

大津宮と近江の古代寺院

近江は畿内(律令制の特別行政区域：大和・摂津・河内・和泉・山背の五国)の東に接する位置にあり、白鳳時代の天智天皇6年(667)には、飛鳥の地から近江大津宮へ遷都がおこなわれました。大津市錦織地区からは、宮跡の中核部と思われる遺構がみつかっています。

大津宮の周辺には、崇福寺跡・園城寺前身寺院跡・南滋賀町廃寺・穴太廃寺の四寺院が建立されました。それぞれ山背や東海道・北陸道(西近江路)への交通の要衝にあり、都の祈願寺だけでなく、大津宮を守護する性格があったのではないかと考えられています。これは、663年の白村江の大敗をうけ、水陸交通の要害の地・大津宮に遷都するという防御策の一環でもあるのです。穴太廃寺(大津市)では、昭和59年(1984)の発掘調査で、同一地点で方位を違えて建て替えられた新旧の伽藍跡が検出されています。創建寺院(飛鳥時代)には、大津宮周辺寺院に特徴的な大型の単弁蓮華文軒丸瓦と「サソリ文」をもつ方形軒平瓦がセットで葺かれていたと考えられています。



近江大津宮と寺院の配置 (安土城2008より)



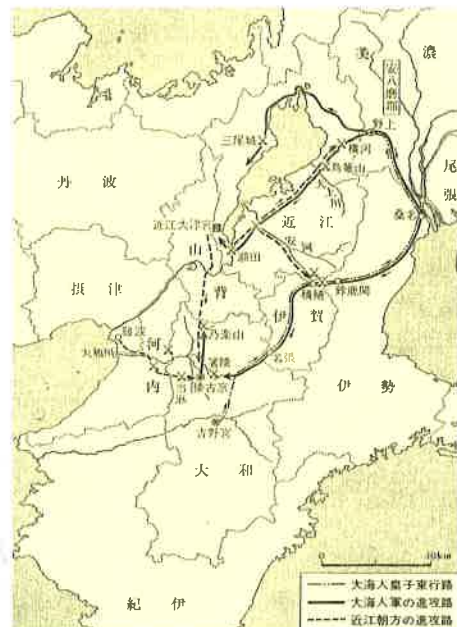
穴太廃寺跡出土瓦 (飛鳥時代)



大津市穴太廃寺跡 (安土城2008より)

壬申の乱と近江

天武天皇元年(672)6月22日、大海人皇子が挙兵して「壬申の乱」が勃発します。大海人軍は26日に桑名郡家(桑名市：郡の政庁)に入るまでの五日間に、伊賀・伊勢・美濃三カ国を制し、尾張を味方に付け、不破関(関ヶ原町)を塞いで、近江朝廷(大友皇子)と東国との連絡路を封鎖します。7月2日、大海人軍数万が近江玉倉部(一説に醒井付近)まで進み、激戦の火ぶたが切られました。大海人軍は息長の横川(天野川)・鳥籠山(犬上郡)・安川(野洲川)・栗太と進撃し、勢多橋の決戦を制して、大友皇子は山前で自殺します。



壬申の乱の進攻路 (田中2008より)



瀬田唐橋復元模型 (滋賀県埋蔵文化財センター提供)

天野川流域の古代交通

古代東山道と湖上交通

律令国家は、畿内から全国に、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道と、30里(約16km)ごとに駅家を設けました。1990年代以降、相次いで駅家や道路跡が各地で発掘によって確認されたことで、古代官道は「道幅も広く、目的地間を直線的に結ぶ高い計画性」をもって施行されたことが明らかになりました。近江国は、畿内と東国の接点に位置するため、奈良時代には東山道・北陸道が、長岡京遷都(784)以降は東海道を加えた3道が国内を通過します。滋賀県内で発掘された古代東山道に関する遺跡としては、現在の瀬田唐橋の下流約80m地点で「勢多橋」の橋脚台がみつき、官道にかかる大規模橋として注目されました。尼子西遺跡(甲良町)では、のちの中山道直線区間を結んだ線上で幅員約12mの道路遺構が検出され、東山道に推定されています。山本遺跡(東近江市)では、8～10世紀の清水駅に関連する建物群がみつかっています。



推定東山道跡(都から美濃方面へ)
(尼子西遺跡/滋賀県埋蔵文化財センター提供)



近江の主要交通路



井戸枠(東近江市/竜田前ノ門遺跡/東近江市教育委員会提供)

東山道沿いの遺跡で、40枚の杉板を方形に10段組んだ幅1.3mの大型の井戸で、役所で使ったものと推定されています。

三大寺遺跡の掘立柱建物

近江には勢多(大津市)・篠原(野洲市)・清水(東近江市)・鳥籠(彦根市)と横川に駅家が置かれました。米原市内にあった横川駅的位置は、醒井と梓河内の二説があり、梓河内には、「馬屋ノ谷」「馬屋ノ谷口」の地名があります。平成2年の醒井小学校での発掘でみつかった大型の掘立柱建物は、駅家に関連する可能性が指摘されています。



掘立柱建物跡

朝妻湊・塩津湊

朝妻湊(米原市)は『延喜式』(927)に塩津、海津、勝野とともに公認港として記載されています。朝妻湊は東山道を通じた東からの物資を、塩津は敦賀からの北の物資の玄関口です。塩津港遺跡では、平安時代後半の水運に関わったとみられる神社が発掘されています。



神社のようす
予想復元図

塩津港遺跡と琵琶湖を望む
(滋賀県教育委員会提供)

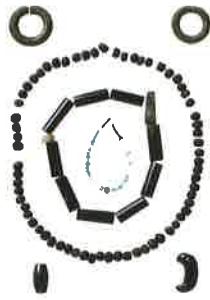
米原市の古代寺院

1) 三大寺跡と「息長の横川」

明治36年、醒井小学校校地で白鳳時代(7世紀後半)の瓦が多量に出土して、寺院の存在がわかりました。塚原地区の発掘で出土した基壇は東西24m×南北21mで、周りには大量の瓦が集められていて、三大寺の建物跡であることが確認されました。しかし、これ以外の寺院遺構は見つからず、山が迫った周辺の地形から、壮大な伽藍が立ち並ぶものではなく、瓦葺建物一棟のみであった可能性が指摘されています。一方、小学校校地から瓦が出土した北側の地区も、地形的制約から1棟程度の建物しか建立されなかったと思われます。塚原地区の建物には、軒瓦の文様から坂田郡の古代寺院に共通する山田寺式とよばれる瓦が葺かれています。一方、小学校校地からは、この瓦とともに奈良藤原宮の本薬師寺で使われている瓦とともによく似たものが見つっています。醒井周辺は古代豪族息長氏から分住した、息長丹生真人の居住地といわれています。



塚原2号墳出土状況



塚原2号墳出土遺跡
(玉類、金環)



三大寺遺跡発掘調査遺構配置図

見つかった遺構

昭和57年、小字塚原で発掘調査がおこなわれ、6世紀後半から7世紀前半の古墳3基と、6世紀末から7世紀初頭の集落跡、7世紀後半から8世紀初頭の建物の基礎となる基壇が見つかりました。



単弁八葉蓮華文軒丸瓦
四重弧文軒平瓦
(山田寺式)



複弁八葉蓮華文軒丸瓦
偏行唐草文軒平瓦
(本薬師寺式)



基壇跡全景



壬申の乱と古代寺院

—(大海人軍の村國連) 男依等、近江の軍と息長の横河に戦って破りつ(『日本書紀』)— この息長の横河(川)は、米原市近江地域から天野川を挟んだ醒井付近を含む地域といわれています。醒井小学校から出土した軒瓦は、壬申の乱後の天武天皇9年(680)に天武天皇が建立した本薬師寺のものと同じです。壬申の乱の激戦地には、犬上川の高宮廃寺、野洲川の花摘寺跡、瀬田川の国昌寺跡など、本薬師寺や藤原宮と関連する瓦を用いた寺院が、死者の菩提を弔うように建立されています。

2) 天野川流域の白鳳寺院

米原市の古代寺院は天野川流域に集中します。三大寺跡(枝折)^{さんだい じあつ}・法勝寺跡(高溝)^{ほうしょうじあつ}・正恩寺遺跡^{しょうおん じ}(飯村廃寺/飯)^{いむらはい じ}・堂谷遺跡(磯廃寺/磯)^{どうだに いそはい じ}・法泉寺遺跡(本郷)^{ほうせん じ}の存在が知られています。関連する遺跡として、瓦を焼いた窯跡である不動谷遺跡(番場)^{ふどうだに ばんば}もあります。法泉寺遺跡を除くと、古代朝妻郷^{あさづまごう}とよばれる地域内にあり、古墳時代に、旧近江町域に多くの古墳を築いた息長氏の勢力範囲に重なります。また、東山道が通過し、河口には古代以来の要港・朝妻湊^{あさづま}が営まれました。なかでも三大寺跡がある醒井は、山と川に囲まれたきわめて狭い場所です。ここを東山道が通っていて、東隣の柏原からは北陸へ、西へ向かうと朝妻湊へ出る畿内^{きない}・北陸・東国を結ぶ水陸交通の要衝にあたり、地理的に東国との交流を押し返すことができる場所です。

法泉寺遺跡

天野川と黒田川の合流点付近にあり、多量の白鳳時代の瓦が出土しました。軒瓦は、単弁軒丸瓦と四重弧文軒平瓦、本葉師寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦があり、両方とも三大寺と同紋の軒瓦です。寺院遺構は未確認で、丘陵部で瓦を焼いた窯^{かま}だともいわれています。

正恩寺遺跡(飯村廃寺)

天野川の河口部北岸に位置し、集落西方の八幡神社を中心に堂の西、堂の前、堂の東、北寺内、南寺内、地藏など寺院関連地名が集中します。出土した瓦は「山田寺式」で、法勝寺跡や三大寺跡など天野川流域の寺院群が密接な関係であったことがうかがわれます。



法泉寺遺跡出土瓦
単弁軒丸瓦(1) 四重弧文軒平瓦(2) 複弁蓮華文軒丸瓦(3)
偏行唐草文軒平瓦(4)



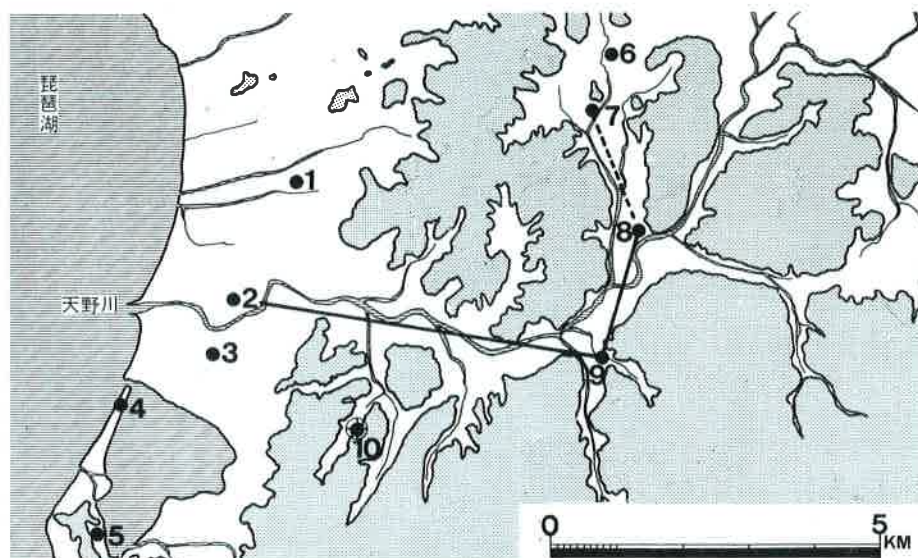
単弁八葉軒丸瓦
(春日神社蔵)



単弁八葉軒丸瓦他
(吉田利光氏蔵)



正恩寺廃寺(八幡神社)



天野川流域の古代瓦出土遺跡

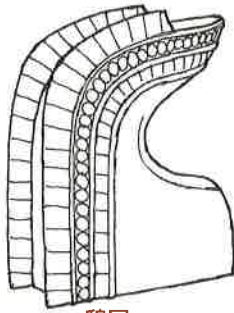
- 1、法勝寺跡(高溝)
- 2、正恩寺遺跡(飯)
- 3、蘭華寺遺跡(中多良)
- 4、筑摩湖岸遺跡(入江)
- 5、堂谷遺跡(磯)
- 6、北方田中遺跡(北方)
- 7、大鹿遺跡(大鹿)
- 8、法泉寺遺跡(本郷)
- 9、三大寺跡(枝折)
- 10、不動谷瓦窯(番場)

堂谷遺跡（磯麿寺）

かつて入江内湖に面していた磯山の東山麓に堂谷・堂ノ前などの地名があります。寺院など瓦葺屋根の大棟両端につけられる飾りの鴟尾や、さんじゅうこもんのきひらがわら三重弧文軒平瓦が採集されています。鴟尾は鰭の部分为中心で、コンパスを利用した正円形の珠文や平行線が施されています。



堂谷遺跡遠景



鴟尾



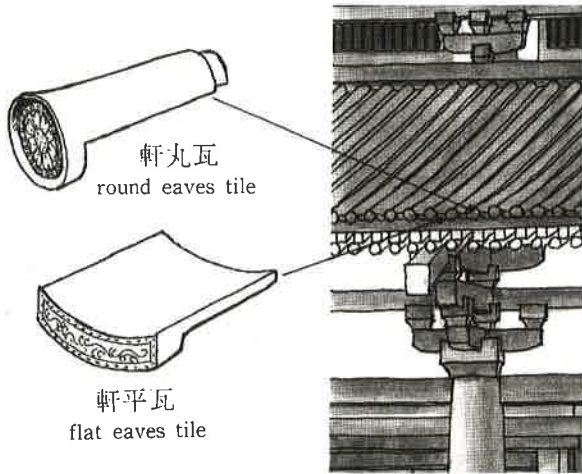
堂谷遺跡出土鴟尾（磯崎清氏蔵）

不動谷遺跡

中山道の宿場番場の西にあり、変電所工事のときに多量の瓦が出土しました。軒平瓦1点のみがのこされていて、内区は2本の弧線の間に斜め方向に平行線と小さな弧線を刻み、下外区は指の押さえにより凹凸を作る特異な文様です。瓦を焼いた窯跡とされています。



不動谷遺跡出土軒平瓦



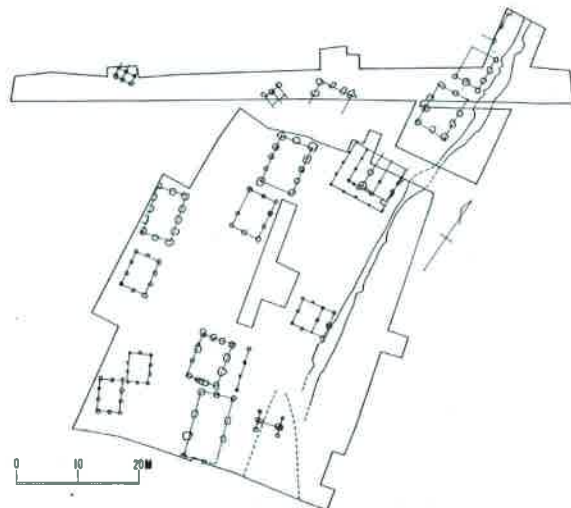
古代寺院の軒先

市内の古代瓦出土遺跡

古代の瓦片は菴華寺遺跡（中多良）、筑摩湖底遺跡（入江）、北方田中遺跡（北方）、大鹿遺跡（大鹿）でも出土しています。法勝寺跡、三大寺跡、正恩寺跡、磯麿寺などの寺院が建立された天野川流域ですが、法勝寺跡を除くと、確実に奈良時代以降に下る瓦が出土しておらず、いずれも奈良時代の早い時期に廃絶したとみられます。



不動谷遺跡遠景



北方田中遺跡発掘調査遺構配置図

聖武行幸と米原市の古代寺院

1) 息長氏の氏寺・法勝寺

六世紀、北近江で最大の勢力をもつようになる息長氏の古墳群から北西約2kmにあるのが、白鳳時代に創建された息長氏の氏寺だとされる法勝寺跡です。その範囲は、発掘の成果や地形、瓦の散布から二町(220m)四方におよぶと想定されています。軒丸瓦は4種類あり、白鳳時代から平安時代まで続いた寺院だったことがわかりました。国内ではこのこと大阪府善正寺跡しか出土していない百濟様式の瓦があります。山津照神社古墳(能登瀬)からは、大陸との関わりが深い金銅製の冠が出土していることから、息長氏と大陸との関係は古墳時代にさかのぼり、氏寺造営にも外来系の軒瓦が暮かされていたようです。

白鳳時代、全国に爆発的に増えた寺院ですが、その多くが荒廃し、無住になったようで、壬申の乱直後に建てられた三大寺跡も、わずか20~30年で法灯を消し、正恩寺跡や磯廃寺も奈良時代の早い時期に廃絶します。そして霊亀2年(716)、同じ地域の寺院の統廃合が進められます(寺院併合令)。このなかで法勝寺跡は、白鳳時代に創建され、平安時代に修復されたことがわかる北近江でも数少ない寺院です。



法勝寺遺跡出土瓦(平安時代)



法勝寺遺跡出土瓦(百濟様式)
(粕淵宏昭氏蔵)



単弁八葉蓮華文軒丸瓦(山田寺式)・四重弧文軒平瓦
複弁軒丸瓦(川原寺式)・三重弧文軒平瓦
単弁八葉蓮華文軒丸瓦・偏行木葉文軒平瓦



法勝寺遺跡採集瓦(粕淵宏昭氏蔵)



法勝寺遺跡位置図



法勝寺遺跡



法勝寺の礎石(高溝/湯坪神社)

2) 聖武行幸と「横川の頓宮」

白村江の敗戦で直面した国家的危機に対する天智天皇の諸政策は、古代史最大の内乱・壬申の乱に勝利した天武天皇に引き継がれます。大宝元年(701)、わが国初の本格的な法令「大宝律令」が公布され、天皇の地位や権限が確定しました。聖武天皇はこの年に生まれています。しかし、その即位後も、長屋王の変(729)・藤原広嗣の乱(740)など朝廷内の政争が頻発し、凶作や天然痘が流行します。天平12年(740)、聖武天皇は「朕は思うところあって、しばらく関東に行く、いまはその時期でないことはわかっているが、止むを得ない。將軍らはこのことを知って驚かないように」という詔を發して、伊賀・伊勢・美濃・近江・山背を巡歴し、最後に至った山背国恭仁郷に遷都します。さらに、紫香楽宮での大仏造営事業へと進みます。聖武天皇の行幸経路は、曾祖父大海人皇子が壬申の乱で吉野から不破の関に至った経路にほぼ沿うものとされ、近江では激戦地に頓宮(仮の宮)を設けています。「横川の頓宮」は息長の地と考えられ、法勝寺跡を建立することができた在地の実力者・息長氏が、ここでも重要な役割を果たしていたようです。行幸には、寺院造立をなしえる在地の有力氏族の支持を得るといふ政治的意図を垣間見ることができるとされています。



息長川 (天野川/寿福滋氏撮影)



竹ヶ鼻廃寺出土銅匙・軒丸瓦
(彦根市教育委員会)

ここでは寺院跡地の整地層を基盤として、倉庫など役所的な施設がみついています。「犬上の頓宮」もこの付近とされ、寺院や施設を造営した有力者の関わりが想定されます。



禾津の頓宮(膳所城下町遺跡)【大津市】
(滋賀県埋蔵文化財センター提供)

聖武天皇は、近江に入って横川・犬上・蒲生・野洲を経て、近江最終の宿泊地「禾津の頓宮」に至り、天智天皇勅願の志賀山寺(崇福寺)を礼拝します。膳所城下町遺跡でみつかった大型掘立柱建物は、八世紀第2四半期頃の宮殿級の施設とされ、古代頓宮の様相がわかりました。



大海人皇子の壬申の乱と聖武天皇の東国行幸の行程(安土城2005より)



米原市内の東山道と周辺の遺跡

1) 古代東山道と周辺の遺跡

古代東山道の復元ルートのうち、米原地区の道筋については、近世中山道の磨針峠越すりばりとうげごえをそのまま古代にさかのぼるとする説が有力です。これは、地形図からみると鳥居本とりいもとから米原(JR米原駅付近)を目指すのが合理的に見えますが、かつて、ここには琵琶湖第二の内湖・入江内湖いりえないこが山裾に接していて、通行が困難とされていたことによります。しかし、入江内湖遺跡が縄文時代から平安時代後期までの集落遺跡とされ、変動はあるもののその形成が12世紀末頃と考えられることから、古代東山道を、現在のJR東海道線に近似したルートに設定することも可能になります。街道の経路は時代によって変遷しますが、醒井から柏原前後の経路は近世中山道にほぼ一致するようです。ここでは、米原市内の古代東山道沿いにある遺跡を紹介します。

推定横川の駅家跡【梓河内】

「馬屋ノ谷」うまや「馬屋ノ谷口」、横川の略称とされる「小川」こかわなどの地名から、駅家跡に推定されています。



下丹生古墳



醒井列石

下丹生古墳【下丹生/市指定史跡】

市内で唯一、横穴式石室よこあなしきせきしつが観察できる古墳です。その構造から6世紀後半のものと考えられ、被葬者は息長丹生真人一族の先祖といわれています。

醒井列石【醒井・多和田】

高さ・幅約2mの規模で石灰岩を積んだ石塁が南北約150m、東西約30~50m巡っています。神籠石こうごいし(靈域・山城)、朝鮮式山城、烽火台、中世山城などの諸説あります。山麓は壬申の乱の激戦地であり、東山道が通る要衝です。



重要文化財
石造九重塔(松尾寺跡)

松尾寺跡【上丹生】

神護景雲3年(769)に高僧宣教せんきょうが靈仙山の周辺に建立した靈山寺の七ヶ別院のひとつです。発掘では本堂跡から9世紀後半~10世紀中頃の土器が出土し、尾根筋ぼねいんの坊院は戦国時代以降に形成されたことがわかりました。



2) 中世東海道(東山道)と周辺の遺跡

鎌倉時代から室町時代の史料にみえる中世の東海道の旅は、ほとんどが、草津から近江路を北上し、不破関を越えて美濃に入り、尾張で近世の東海道ルートへとつながるものです。将軍の上洛・軍勢の移動・個人の旅を問わず、このコースが京都と関東・鎌倉を結ぶ道として、安定的に機能していたようです。そしてこの道は「海道」と記されることが多く、『太平記』で、討幕計画に失敗した北畠具行が柏原で首を打たれる場面でも「海道ヨリ西ナル山際二、松の^{ひとむら}一村アル下二」とあります。ただし、同じ『太平記』の北条仲時が番場の蓮華寺で、一族・家臣と自害した部分では、番場を「東山道第一ノ難所」と記しています。草津から米原市内を通過して美濃赤坂へ至る古代東山道を、中世には東海道ともよんでいたようです。

蓮華寺【番場】

元弘3年(1333)、京都を追われ鎌倉へ向かう六波羅探題北条仲時が、行く手を京極道管らに阻まれ、総勢430人余りがここで自刃しました。五輪塔が整然と並ぶ墓地と、氏名や年齢を記した「陸波羅南北過去帳」(重文)が伝わっています。



北条仲時一族の墓

箕浦城跡【箕浦・新庄】

近江特有の方形居館のなかで、きわめて大規模に構えられたのが箕浦城跡です。天野川北岸に井戸村屋敷・奥屋敷・新庄城が横一列に構えられました。現在も城主今井氏の居館跡が水田の中のにこっています。ここは東山道と北国街道、天野川水運の交流点で、市が開かれる場所でした。

長比城跡【長久寺】

江濃国境で東山道を押さえる要衝に築かれました。浅井長政が信長の近江侵攻に備えて改修しますが、城将堀秀村が信長に通じて開城します。土塁や虎口が良好にのこります。

鎌刃城跡【番場/国指定史跡】

南近江との境目にあり京極氏と六角氏の争いのなかで、たびたび帰属を変えています。永禄2年(1559)、城主の堀氏は浅井氏に属しましたが、やがて織田信長に内応して、坂田郡の拠点的な城郭となります。発掘により先進的な石垣作りの城であることがわかり、礎石建物や枡形虎口が検出されました。



鎌刃城跡



太尾山城跡

太尾山城跡【米原・西円寺】

在地土豪米原氏によって築城されたといわれています。南近江との境目に位置することから、京極氏や浅井氏と六角氏の争奪の場となりました、北城と南城から構成される「別城一郭」の構造です。

【主な参考文献】

- 安土城考古博物館2008『仏法の初め、茲より作り —古墳から古代寺院へ—
- 安土城考古博物館2005『聖武天皇とその時代 —天平文化と近江—
- 榎原雅治2008『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ、旅路風景』
- 小笠原好彦・田中勝弘・西田 弘・林 博通1989『近江の古代寺院』
- 田中勝弘2008『古墳と寺院 琵琶湖をめぐる古代王権』
- 米原市教育委員会2008『息長氏の遺宝 —山津照神社古墳とその周辺—
- 米原市教育委員会2009『湊・舟、そして湖底に沈んだ村 —まいばら発、琵琶湖の水運・くらし1万年—

※論文・発掘調査報告書については割愛しました。



推定横川の駅家跡(馬屋ノ谷)



【協力機関・協力者（敬称略）】

磯崎 清・粕渕宏昭・北村圭弘・寿福 滋・横田洋三・吉田利光
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会・滋賀県埋蔵文化財センター・
滋賀県立安土城考古博物館・滋賀県立琵琶湖博物館・長浜市立長浜城歴史博物館・
東近江市教育委員会・彦根市教育委員会・守山教育委員会

天野川流域の古代寺院 壬申の乱から聖武行幸へ 一地方寺院の役割一 2010.3.6

米原市教育委員会 〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206 TEL.0749-55-8106 FAX.0749-55-4040